



100年後の世界においても変わらぬもの

「先生～、サッカーしよ！」

最近、きまって休み時間にある男の子が誘いに来ます。

と思ったら、別のクラスのある女の子が

「先生～、鬼ごっこしよ！」

と誘いに来たりもします。

授業の準備など諸々やることがあって毎回出られるわけではありませんが、誘いがあった時はできるだけ一緒に遊ぶことにしています。

一昨日は、鬼ごっこに誘いに来た女の子に

「後で行けると思うから先に行っててね」

と伝えてから、授業に使うための本を数分間読んでいると、さっきのその子が運動場からすごい勢いで戻ってきました。

その直後、教室前に仁王立ちした彼女から

「先生！なんで本読んでるの！あそぶって言ったでしょ！」

と盛大に怒られました。

ごめんごめんと謝りながらグラウンドに手を引っ張って連れていかれる私。

この瞬間の主導権は完全に子どもたちが握っています。（一連の様子を見てサム先生が大笑いしていました）

「教室に遊びの誘いに来る」子どもたちは、私のことをおそらく「毎回ではないけれど都合が合えば遊んでくれる存在」と認識しているのでしょう。

ふと、友達の家ピンポンを押して「一緒に遊ぼ」と誘いに出かけていた幼少期を思い出しました。

「特に約束もしていないのに遊べる存在」は、実はとても稀有な存在です。子ども時代の特権と言ってもいいかもしれません。

そして、その「遊びの誘い」が、親でもなければ友人でもない「私」に向けられる点に、教師という仕事の面白さがあると思っています。

例えば、休日に家のリビングでゆったりくつろいでいるお父さん（あるいはお母さん）を揺さぶりながら

「ね～一緒に遊ぼう！」

と子どもがせがんできたとします。

これは、「特に約束をしていなくても今までにたくさん遊んでくれた経験」がそのようなコミュニケーションを生んでいるとも見ることができます。

仮に、近しい間柄であっても「一度も遊んでくれたことがない相手」には、そうした偶発的な遊びの誘いはほぼ向けられないでしょう。

さっきの幼少期の頃の話でも、「いきなりの誘いに乗ってくれる友人宅」が、私の頭の中に幾つかリストアップされていた記憶があります。

それが過去の経験で分かっているから、家のチャイムを鳴らせるのです。

そして、願いが叶って遊べることが分かった時は「やった！」と飛び上がったものです。まるで何かプレゼントを貰った時のように。

そう思うと、遊び相手は目には見えない色んなものを自分に贈ってくれていたことが分かります。

遊びは面白さを生み出すものですが、同時に体力や時間を使うものでもあります。

その時間なり体力なりを使って、楽しさや面白さや達成感などのある意味無償で渡してくれる遊び相手の存在は、やっぱり稀有なものだといえます。

ほとんどの場合、そうした「無償の贈り物」を最初に渡してくれるのは親です。

遊ぶという経験だけでなく、励ましてくれたり、褒めてくれたり、叱ってくれたり、応援してくれたり、一緒に喜んでくれたり。

これらを、親は見返りなどを求めるわけでもなく自然と贈っています。

子どもは、そうした親の関わりを経て、「ああ、お父さんはこうやって支えてくれるんだ」「お母さんはこうやって愛してくれるんだ」ということを言語化せずとも感じ取り、学んでいくのだと思います。

そうして「身近な人との関係の作り方」や「コミュニケーションの仕方」などを無意識的に体得していきます。

この時点では、コミュニケーションの中心は「家族」に限定されていることがほとんどです。

そして、身近な人との間に確かな「愛着」が形成されると、次第に興味は外へ外へと開かれるようになっていきます。

安心や安全が担保されているからこそ、伸び伸びとした生活が送れるという側面は間違いなく存在します。

サッカーのフォワードは、ゴールキーパーやディフェンダーがいるから攻められます。

最後の砦を含めた守備陣の安心感が強ければ強いほど、思い切った攻撃が可能になることは疑いようがありません。

スカイダイビングも、パラシュートが絶対に開くという信頼があるから飛び降りられます。

開くか開かないか不明なパラシュートでは、絶対に飛べません。恐怖で体がこわばって、それこそ一歩も動けないでしょう。

いざという時に作用するセーフティネットの存在こそが、意欲や挑戦心を掻き立てるといった側面が確かに存在します。

「愛着」という名の心の砦を得た子たちは、一定の年齢になると「学校」というコミュニティの門をくぐります。

この学校という場所において、教師の果たす役割は何かということの特にここ最近よく考えます。

知識を授けたり、技能を磨いたり、という側面ももちろんあるでしょう。

しかし、私が子供の頃に比べて、その役割の重要性は大きく下がりました。たとえば、囲碁やチェスなどにおいて、人工知能がプロの世界チャンピオンを打ち破ったことは、大きなニュースになりました。

これによって、いわゆる「師匠と弟子」などの関係も大きく変わっていくことが予想されます。

おそらく、今後囲碁やチェスを学んでいくのは、人間の師匠からではなく、コンピュータがメインになるはずで、この傾向は以前からありましたが、今後はもっと加速されるでしょう。

学ぶのは人工知能からであり、最後の対戦だけが人間同士ということにな

るのかもしれませんが。

つまり、知識や技の伝達においては、教師の果たす役割の重要性がどんどん下がってきている時代だということがいえます。

私は、講演会でよく「100年後の子どもたち」について話します。

人工知能や ICT の進展によって、我々が想像もつかないくらいテクノロジーが進んだ 100 年後においても、変わらぬ教師の役割があるとすれば、それは何かということを考えるのです。

身近な家族との間に「愛着」という名の砦を築いて学校に来た子たちが出会う、「先生」という役割にある人が担うもの。

その中でも私が取り分け大切だと考えているのは、「親以外の人でも無償のプレゼントを渡してくれる人が存在することを実感させること」ではないかと考えています。

お父さんじゃなくても、認めて励まして支えてくれる人がいる。

お母さんじゃなくても、愛して慈しんで導いてくれる人がいる。

家族以外にも、自分の為に一所懸命になってくれる人がこの世界にいる。

このことを実感できたならば、それは心の中に「第二の砦」ができたといえるのではないかと思います。

家族以外との他者との関係においても、そうした心のセーフティネットを築くことができると確かに実感できたならば、ますますその子の興味や行動は大きく外界へ、他者へと開かれていくでしょう。

そして、そうした目には見えない数々のプレゼントを渡すことは、AI には不可能だと思うのです。

きっと 100 年後の世界であっても、そうした教師の役割の重要性は残っていると私は予想します。

むしろ、その重要性は高まっていくと言えるのではないかとすら思っているところではあります。

「先生～、サッカーしよ！」

「先生～、鬼ごっこしよ！」

と休み時間のたびに、いろんなクラスの子たちが誘いに来る姿を見ながら、そんなことを考えていました。

いきなりピンポンを押したあの時と同じように、『突如“遊ぼ！”と声をかけてもこの人はきっと遊んでくれる』と私に対して感じてくれるようになってきたことに、じんわりと心が温くなる感覚を覚えた訳です。

お父さんやお母さんの深い愛情に比べればきっと足元にも及びませんが、今日も自分にできる限りの贈り物を学校で渡したいと思います。

おかげさまで、コスモスハーモニーも今日で 100 号の節目を迎えました。この通信も、私にできる一つのささやかな贈り物の形だと思って、これからもぼちぼちと書き続けていきたいと思います。

気づけば 12 月に入り、2022 年も残すところあと少しとなりました。

子どもたちと、この教室で共に過ごせる時間もあと 3 カ月ほどです。

限りある時間に感謝して、残りの時間を大切に過ごしてまいります。

いつも、子どもたちの成長を陰ひなたとなって支えていただき、誠にありがとうございます。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。(渡辺道治)

[1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](#)